

開成の杜

第68号 ● 2005年10月1日 ● 郡山女子大学大学院 ● 郡山女子大学 ● 郡山女子大学短期大学部 ● 郡山女子大学附属高等学校 ● 郡山女子大学附属幼稚園

● 発行所 / 学校法人郡山開成学園 〒963-8503 郡山市開成3丁目25番2号 ☎ 024(932)4848(代) <http://www.koriyama-kgc.ac.jp> ● 発行人 / 学園長 関口富左



耐震工事終了の62年館

(撮影 山口郁生)

夏から初秋にかけて、今年ほど季節感に切れきれの変化を感じた時はない。季節の移り変わりを順調に感じられなかったとき、今はいつうなどと問うた。長いこと開成の地に住みついて、季節の変化を美しく、その環境を愛でて暮らしていたことがこの変調を誘った。順調な変化でない季節を、今年ほど私のなかで切れきれに感じて「今はいつう」などの思いに迷う気が生じたことは初めてであったので、何か不安な心底ゆえのことかと思ひ見たのであった。



学園長 関口 富左

戦後早々、本大学を創設すること意識した折を思い出すと、戦後という何もかも不自由な日々であったので、種々の不安な当惑としてのあきらめに似た思いの故で、些細なことは気にとめない日々であったと振り返る思うのであるが、このところ種々の出来事が大きく、また多様に発生し、今日の生活の状況が、個々の異なった不安となつてしまつたといふやうなように思ふ。思いもかけぬ事件が世界中で起つたり、自然現象も不安事象が頻発したりと、何が起るかとの思いを除去することが出来ない。幸い、学生・生徒・園児たちは何事もなく勉学に、運動等に元気に活動しているが、他領域などでの事例を知ると、起こりくるかもしれない不安を持たざるをえない今日この頃である。何故こんな気持ちになるのか、私の高齢化の故とは思ひもするが、ニュース等からあまりにも危機の内在を思い知らされてしまふのである。

戦前の日本のあり方と、戦後から

「新たな学への実践」

― 栄養・食物研究所の設置 ―

今日に至る人々の思いの在りようの違いは歴然としているが、それは特に個の主張への方向となり、以後半世紀以上も経たないなかで不慣れた個性重視が、今や当然以上となり、他への思いを破棄して自己中心の今日に至った現代の状況が、ここまで来てしまったのかと見受けられるのは、私の思い違いであろうか。

私は、敗戦直後、当時の個性重視への傾斜の風潮に対し、不安な中で他との協調の必要性を併せ持つことを感じて、「個の確立」と「他との協調」の理念を提示し、他者への「尊敬」、自己に対して「責任」を定めて、創造への思いを求め「自由」の三目標を制定し、今日に至っていることは全学知ることであり、この行為の実践について継続、浸透しつつあると見ているのである。

本学は創立以来、地方教育や生活に不備である感性や美意識への人間性を重視し、芸術鑑賞・教養講座を継続実施してきているが、現代の方向として、ただただ合理へ、便益への方向を求めて進んでゆくの風潮は、危機感さえ覚えていくが、私の思慮不足であらうかと見てもいい。

「知を求める」ことは、そのベースに感性という人間本来の感ずる心を基としての希求で、人情としてその密度を増してゆくべきではあるまいか。

「知は感性の庭に咲く」と。

今、本学園は創立六十周年を明年に迎えるが、地域の奉仕・実践を、本学の五十余年の経験のなかで輩出した管理栄養士達が学内に多数研究している「食と栄養」によって、周囲社会の方々への奉仕を以って、栄養相談等の研究所を設置するべく計画で、誰もが求めている「健康なわれを」と、創ることへの実践を通して役立つべく、諸準備中である。

清澄な中秋の天空を凝視めつつ…

(H17・8・31記)

学園における授業評価をテーマに

平成十七年度第四十二回学園教育充実研究会ひらく



開成模範の関口富左衛門氏

プログラムではまず、関根明伸委員より趣旨説明が行われた後、関口修理理事長より「大学評価の基準について」と題して講演が行われた。



講演する関口修理理事長

第四十二回学園教育充実研究会が八月十八日、十九日の両日、芸術館大教室を主会場とし、学園全教職員が参加して開催された。学校法人郡山開成学園の建学の精神に基づき、教育内容を継続的、系統的に深化・充実させるため協議を進めてきたものである。

今年度はこのような従来の方針を踏まえつつ、学生・生徒たちが何を求めているのかを把握し、また本来の教育とは何かを協議し授業改善に生かすことを目的に、研究授業(授業評価)を実施することにした。テーマは「学園における授業評価3」。

初日の全体会では、関口富左衛門氏が「今日の社会状況等を考えると、心を入れ替えなければならないことが多くある。これまで各教員が『教育とはこういうものである』と進めてきたが、第三者評価の導入によってさらに厳しく教育を見つめ直す必要が生じてきた。研究会を通して、本来の教育のあり方について教員各人の心の中に新たな分野の形成を図っていきたい」と挨拶した。



研究報告する会田助教

関口理事長はまず、評価においては自己の持っている認識を再認識することが必要であり、自助努力で自己をさらに向上させていく努力が必要だ、と指摘。第三者評価は立場を同じくする「同僚」によって行われることが基本であるとした上で、「同僚が同僚的立場によつてしか理解することができない苦悩を分かち合いながら、日々の進展に結び付けていくということが大学に求められる評価ではなからうか」と述べた。続いて大学評価の基準について、十領域の評価領域それぞれについて、評価項目ならびに観点を具体的に解説しながら「同僚にはお互い同士でなければわからない苦労がある。その苦労を共有することが重要だ。いっそう良い教育ができるよう、対話を通してお互いに知恵を出し合うことが求められている」と指摘した。

午後には、本研究会に先立って行

われた研究授業について報告が行われた。まず、附属高校音楽科・松崎洋子教諭により、「演奏法」の授業実践とその評価の報告が、続いて短大保育科・音山若穂講師による「保育実習」、短大家政科食物栄養専攻・会田久仁子助教による「栄養指導論実習」、大学人間生活学科・深谷笑子助教による「生活経営学」の報告がそれぞれ行われた。

二日目の分科会では連日研究が行われ、その後の全体会で成果が報告された。最後に関口学園長から「いづれもが真摯な気持ちでどのように教育に対応するか、本学の教育がいつそう本質的なものに向かうよう、建学の精神を中心として実践的な教育についていっそう考えたことと思う。教育の本質に触れ、高い評価を出していることに敬意を表する」との講評があり、「二十一世紀の新しい教育の創造に向かうに当たって今という時代にどう対応するかを熱く語りかけ、本年度の研究会を締め括った。

本学食物系教授六名が実験指導

東北地区農業実験実習講習会

農業高校の教師を対象にした第四十九回東北地区農業実験実習講習会「食品化学」が八月八日から五日間、本学家政学館で開催された。全国学校農場協会と全国高等学校農場協会の主催で沖縄県や青森県から三十名が参加した。



広井教授(左)の指導で実験を体得する高校教諭

質検査、庄司一郎教授「米・飯の品質および食味特性評価」、角野猛教授「食品の微生物学的検査」等を担当した。

今年の発掘では平安時代の竪穴住居と土器焼成遺構、二万五千年前後の旧石器約二百点の検出という大きな成果をみた。

附属高校生が参加する高大連携授業は二十一日に行われ二十名が調査に加わった。文化学科の学生の指導を受けながら、初めての発掘に挑戦した。運良く石器の発掘に成功する生徒もいれば、なかなか当たらない生徒もいた。

学生、生徒にとつて土の中から歴史の真実を掘り出す感動に一瞬でも触れることができたひと時であったのではなかったろうか。

「二人ひとりの個性を伸ばし 各人の特色を発揮するために」

第二十九回中高教育連けい研究会 附属高校



公開授業を見学する参加者

第二十九回中高教育連けい研究会は、「一人ひとりの個性を伸ばし、各人の特色を発揮するために」をテーマに、六月三十日に県内各中学校をはじめ本学、短大の教員ら多数が出席して開催された。

午前中は新教育課程の下でのコース、教科の特色ある授業が公開され、その後、意見交換会が行われた。参加者はそれぞれの意見を出し合い、中高の相互理解を深めた。

午後からは、全体会に続いて、文部科学省教科調査官の太田光春氏による「『確かな学力』の育成を目指す



意見交換会風景

と題する講演があり「真の学力とは何か」という教育における大きなテーマについて教育現場における現実的な諸問題を通して、非常にわかりやすく講演された。特に、評価の問題については教育現場においても今後に取り組むべき重要なテーマ、課題とあつて参加された先生方も真剣に耳を傾けていた。

新しい教育課程も完成年度を迎え、中高の連けいの重要性を改めて認識することができた。



未知の世界を掘り起こす生徒たち

学生奨励賞に本学から二名

●日本家政学会東北・北海道支部
研究発表会学生の部で表彰される●



歓迎の挨拶をする本学関口富左学長

日本家政学会東北・北海道支部第五十回総会と研究発表会が九月九日、本学創学館で開催された。総会では、開成大学として本学関口富左学長が「学会の更なる充実発展を祈る」と挨拶した。また、支部長の安喰功氏(山形大学)は「会員が年々減少している。若い先生方への啓蒙が必要だ」として会員増への努力を促した。

会務報告、会計決算報告を承認、新年度事業計画を決めたあと、支部からの研究助成金が本短大・知野愛講師へ贈られた。

次いで、次期支部長に選出された石黒純一氏(秋田大学)が挨拶、「来年度は全国大会が秋田市で開催される。これに併せて支部総会を秋田大学で開催したい」と提案、了承された。

総会では、午前と午後二回に会員による一般研究発表が行われた。三十名がそれぞれの研究課題をまとめたもので、本学からの発表は次の通り。(一)内は発表者。

▽「家政学における社会家政学領域を基にして」(深谷笑子)▽「女子短大生の家族観について—幼少時の成育環境との関連を中心として—」(知野愛 研究助成金対象)▽「フリーターニートと家庭家族」(安田純子)▽「台所における室名および空間構成上の混乱に関する考察」(北川圭子)▽「乳児空間における母親の住意識に関する調査研究Ⅰ」(阿部恵利子)▽「乳児空間における母親の住意識に関する調査研究Ⅱ」(宗形初枝)▽「福島県の魚介類調理について—浜通り地方における調査—」(阿部優子)▽「食材料確立へのアプローチ—家政学部における食と農への関わり—」(庄司一郎)▽「黒大豆の水浸漬による機能性アミノ酸の変動」

研究成果が著書に

本学教授が教育専攻に沿った研究成果をまとめた著書が相次いで発刊され、一般書店に並べられている。出版順に紹介しよう。

ふくしま食の民俗

歴史春秋社刊

近藤栄昭教授(短期大学部)、平出美穂子助教授(大学)の共著となる本書は歴史ふくしま文庫シリーズの一冊として出版された。

「人の生きる糧、食。福島県各地の庶民から生み出された、食の文化をここに伝える」と書かれた帯に誘われて表紙をめくると、カラー写真に目とまどむ。行事料理としての数々のお餅が並ぶ。婚礼、正月、出産後、食始め、葬式、そつだ、こういう一馳走があつたと一晩一晩の食材と盛り付けを追う。本文には昭和初期の各

性アミノ酸」(荒谷美千子)



発表する阿部優子さん

支部総会では、昨年度より会員の他に学生の研究発表の場を設けている。今回は八名が大学院、大学で学び、研究した結果を発表した。その結果、総合評価された三名に学生奨励賞が贈られた。



学生奨励賞を受ける桜井さん

本学教授の出版相次ぐ

市町村でのお餅の内容が詳しく記載されている。行事の意義を考え、それに則した食材で「一膳」「二膳」が構成されている。それにしても、行事に出される「お餅」がいかに多いか。正月のお雑煮から始まって年末の餅つき膳まで味の種類も多彩。「へえ」の連発である。

本書には先祖より伝わる、わが家のしきたり、風習、家例を残したいという著者の思いがこめられている。

阿武隈川の舟運

歴史春秋社刊

「川をめぐる人と物の交流」をまとめた竹川重男教授(短期大学部)の著書。

本学教授藤本健四郎 農学博士が特別講演

平健四



講演する藤本教授

総会を記念しての特別講演は本学食物栄養学科主任の藤本健四郎教授。演題は「油脂の機能—おいしさと健康—」。

藤本教授は東京大学大学院農学系研究科修士課程を修了した後東北大学助手を経て教授。本年四月より本学教授。農学博士。油脂の機能性を研究している。

講演はまず、油脂の語源として「油」は常温で液体状のもの。サラダ油、大豆油、「脂」は常温で固体状。牛、乳、豚の脂身と述べ、その油脂はエネルギー

発達遅滞をもつひとたちの 誕生から安らかな終末 までの療育と福祉

大場社刊

著者の大澤澄男教授(大学)は社会福祉士、日本地域福祉研究所員として介護支援の現場に立ち、新潟県長岡市の特殊学級家庭教育講座を担当した一年間の講義と出席者の質問、意見を整理し、体系化した貴重な記録である。

本書は知的障がい児の児童福祉の流れる阿武隈川もその役目を果たした。本書は源頼朝の奥州合戦で、戦いに破れた者が家財道具を舟に積んで下流に逃れたという伝承から、古い時代から舟による移動が行われていたと考察する。本格的に運用されたのは江戸時代からで、近代化により鉄道や陸運の発達によって終焉

の供給源であり、必須脂肪酸の供給源であると食品中の役割を解説した。そして油脂を含む食品はおいしく、故に脂肪太りが敵対視されている現状に触れ、体に脂肪が付にくい油脂を使った新商品を紹介した。健康志向の強まっている中で、新しく開発されているシアシルグリセロールや中鎖脂肪酸を含む油脂等の健康機能を重視した脂質について解説、更なる開発への期待を示した。

平助教授が 福島民報紙上で連載中

ふるさとの食文化研究家として知られる本学の平出美穂子助教授が四月から福島民報紙上に「ふくしま伝統の味」を連載中である。

月一回で本県の農作物を使った家庭料理の作り方をレシピを添えて紹介している。連載は来春三月まで。毎回食欲をそそる、おごつおが並んでいる。

施設、成人福祉施設が直面している生活支援と指導教育、治療教育の問題点を指摘、解決策を提案している。また、法改正により「精神薄弱」の用語が「知的障がい」に統一されたことにふれて、著者は更なる表現として「発達遅滞をもつひと」を提唱している。

著者は本書のほか「福祉実践エッセイ、マスターキーを捜す旅」や「施設長三年目のマゴゴ日記」等の新任施設長シリーズを出版している。

を迎えるまでを時代的、社会的背景のもとに豊富な資料と写真、データをもとに五部構成で記述している。舟運は廻りが主流だが、本県では信達地方の特産である蚕種、生糸、絹布が阿武隈川を利用して遠隔地まで販路を広げ豊かさをもたらしたのとは興味深い。

日本調理科学会 東北・北海道支部総会 本学で開催

総会は九月八日、本学芸術館大教室で開かれ、次期支部長に酒向史代氏(北海道教育大学札幌校)を選出した。

続いて聖徳大学栄養学研究室の菅原龍幸教授が「清涼飲料水—特にミネラルウォーター類の性状について—」と題して講演した。

研究発表では、聖徳女子短大や秋田大など十三の大学、短大から「一関市周辺の餅文化」「梅干しの浸け方」と食味への影響等の研究成果が報告された。

学園教育方針を説明 相互理解を図る

—家族会方部教育懇談会—

本学園家族会の方部教育懇談会は、大学、短大が七月二日の仙台、浜通り部会から始まり、十八日の県南部会まで八会場で開催した。

この内、郡山方部会は七月九日建学記念講堂に約三百名の保護者が出席して開かれた。初めに金澤裕会長が挨拶し、次いで関口富左学園長が日常生活での品位高尚、夏休み中の生活指導で「家庭の協力を呼びかけた」。

続いて、学務部から単位の履修、認定、科目の出席日数、授業料等の納付について教務に係わる内容の説明があった。学生生活課からは学生指導の現状が、就職部からは学園側の就職支援体制が報告された。

このあと各学科ごとの個人面談に移り、担当の先生方と懇談、教育内容を理解を深めた。



挨拶する学園長 県南方部会にて

大学院・大学・短期大学部

平成十八年度入学者選抜実施要項発表

大学・短期大学部 合同説明会ひらく

本学では「二十一世紀を担う女子高等教育充実のために」をテーマに平成十八年度入学者の選抜実施内容説明会を七月一日に開催した。本県はもとより東北、北関東地区の高校から進路指導教諭ら約百名が参加、本学の教育方針や各学科の概要に耳を傾け、資料に目を通していた。特に選抜概要の発表では、盛んにメモする参加者が見受けられた。



個別面談では順番待ちの賑わい

さらに、各学科、専攻ごとの個別面談では、選抜形態に係わる具体的な対応や資格取得、就職状況

についての質問が多かった。同時に設置された出身学生の面談会場では、教え子から本学での生活ぶりを聞き参考にしていた。

大学・人間生活学科三コース制へ 一級建築士受験資格取得 認可申請中

人間生活学科は十八年度より三コース制となる。本学家政学の「人間守護」理念を実現することによって社会の充実、発展に寄与することを目的とする。

一、生活総合コース
よりよい人間生活の充実をめざし、人間生活を総合的に、専門的に学ぶ。取得できる資格は①中学、高校教諭一種免許状(家庭)、②高校教諭一種免許状(福祉)、③建築デザインコース

二、福祉コース
福祉の本質を究め、福祉の理論

と実践を学ぶ。取得できる資格は①中学、高校教諭一種免許状(家庭)、②高校教諭一種免許状(福祉)、③建築デザインコース

人間生活の基本である「住む」ことについて高度の専門的理論と技術を学ぶ。取得できる資格は中学、高校教諭一種免許状(家庭)。

なお、一級建築士受験資格(実務経験二年)の取得認可を申請中である。一級建築士受験資格取得は東北、北海道での女子大学では初めてのことであり認可が待たれる。

附属高等学校



道行こう附属高校へ 体験入学会開催

楽科や食料科では、高校の授業の一端を体感している。昼食は自慢のカレーライスを試食し、続いて音楽科のミニコンサートを鑑賞した。芸術性の高い演奏に感動していた。

閉会式では体験入学者を代表して二十九日には郡山三中の吉岡恵さんが「実際に見学、体験をして頭の中で想像していた高校生活がより現実味のあるものになった。今回参加して学んだこと、感じたことをこれから学習に、進路選択に役立てていきたい」とさわやかに挨拶した。三十日には郡山六中の新明恵美さんが感想を述べた。体験入学会は二回目を十月二十九日に予定している。

特集 オープンキャンパス

見えてくる私の青い空



模範授業に出席し、施設を見学して、直接志望学科の先生方からアドバイスが受けられるのはオープンキャンパスが唯一の機会。近年入学者志願者からオープンキャンパス日程の問い合わせが多く寄せられている。本学では本年度のオープンキャンパスを七月十七日と九月四日の二回開催した。参加者は東北各県や北関東、新潟から合わせて千名弱。開成式での関口富左衛門先生の挨拶で、建学の精神と沿革、女子の高等教育への熱意が語られ、本学の人間教育とその概要に理解を深めた。各科が実施した当日の模様を紹介する。

パネル展示で担当教員が教育内容を説明

大学／人間生活学科

人間生活学科は「家政学原論」「生活経営」「生活福祉」「衣食生活」「生活情報」「インターネット」の八部門で教育内容を示したパネルを用意した。参加者はそれぞれ



衣生活部門で洗剤のメカニズムを学習する参加者

個別相談では、カリキュラム内容をさらに詳しく、また専門資格についての質問が多くあった。

糖尿病食を試作・試食

短大／家政科食物栄養専攻

食物栄養学科は①スポーツにおける栄養の役割②骨密度の測定実習③管理栄養士と栄養士の仕事の違いやその心構えをテーマに模擬授業を行った。

①ではスポーツ選手向けの献立をスライドで紹介。②では日本人に不足しているカルシウムの重要性を測定実習で示し③では本科で学ぶ意義、目標を説明した。

個別相談では選抜に臨む際のアドバイスを求める質問が多かった。



骨密度の測定実習風景



糖尿病食をつくる高校生

食後は、使用した食器の洗浄、実習室の清掃も行い衛生面での指導も受けた。

意欲的に取り組んだ参加者

短大／保育科

模擬授業への参加者は保育士や幼稚園教諭の意思を固めた生徒がほとんど。幼稚園や保育園の役割や保育とはの課題に自分ならどうするかを真剣に考え、教師の質問に答えを出していた。

また、「発達心理学」という分野を初めて知った生徒が多く、保護者も一緒に映像の画面に興味を注いでいた。

実技では「歌とリズム遊び」「保育造形」を体験した。



車椅子の扱い方を体験した参加者

保護者も一緒に学習に取り組み家事援助で理解を深めた。続いて車椅子を使用した移動介助を実践した。



個別相談で保育科の概要を聞く参加者

「保育造形」を体験した。

正規授業での試験課題曲をレッスン

短大／音楽科

参観授業はピアノと声楽のレッスン。参観者は学生にレッスンをする様子を熱心に見学していた。

個人面談では選抜に関する実技課題の内容を聞く生徒が目立った。また、共通実技の聴音、新曲視唱、楽典に不安を持つ高校生もあり、その悩みを相談していた。



個人レッスンを真剣に見学する高校生と保護者

関心事は寮生活

家庭寮

施設見学では家庭寮が注目された。遠方からの参加者はマンションやアパートより学生寮が安心できるとあつて見学者が多く、特に保護者の関心が強かった。寮費や食事関係、部屋の間取り等々案内役の職員に矢継ぎ早の質問攻め。

案内された部屋では二名同居の生活にうなずき、防犯対策の説明に安心した様子であった。



寮生活を想像して間取りをチェックする高校生。

フーコ振り子に驚きの表情

ネーチャードーム

創学館に接続するネーチャードーム内には本学自慢のフーコ振り子が静かに振幅を繰り返している。五層の吹き抜け天井から下げられる振り子の動く様子を初めて見る参加者は驚きの表情で注視する。教員が説明する「自然を凝視して師としよう」の精神に感銘していた。



目もくもく振り子球体を鑑賞する高校生と保護者

風俗美術館と慎思庵

本学自慢の施設には対面式の建学記念講堂と、振り子の他に「風俗美術館」と「慎思庵」がある。風俗美術館には古代から江戸時代までの代表的な衣装が実物大の人物に着付けられて展示されている。「衣食生活」を学ぶ学生には貴重な資料である。慎思庵は本館屋上に設置された三つの茶室の総称。和風庭園に立てば開成山大神宮の老松のみどりが涼風を呼ぶ。自然に囲まれた環境の中で見学者はひとときの憩いを味わっていた。

研究奨励賞 文化連盟賞に輝く放送部

放送部

全国大会へは十四年連続出場。放送部。福島県代表として第五十二回NHK全国放送コンテストの研究発表、アナウンス、朗読の各部門に出場した。それぞれ立派な発表を行い、研究奨励賞を受賞した。また、第二十九回全国高校文化祭放送部門では、アナウンス朗読オーディオビジュアル部門で高い評価を得て文化連盟賞を受賞した。

来年はあの晴れ舞台で

体操部

千葉ポートアリーナでの高校総合体育大会。補欠出場の鈴木さとみ選手は静かな中にも緊張感あふれる雰囲気。全国大会の感動を味わった。

体育部顧問の柴早苗先生は「全国レベルの演技にこれからの指導の方向性が見えたことが大きな収穫」と語る。来年こそ鈴木選手が晴れ舞台で演技することを誓った大会であった。

最後まで諦めない

剣道部

部創設以来、念願のインターハイ出場を果たした剣道部。大会中、猛暑が

全国大会へ次々と出場

三年連続十一回目の全国大会

本校チームは高校連盟大会に於いて堂々の優勝を飾り、三年連続十一回目の全国大会インターハイ出場を決めた。これは春の高校バレー全国大会



全国大会出場選手勢揃い



郡山駅前に掲出された激励幕

ティールーム

コミュニケーション・フォーラム

イラスト
久家 三夫

「無言館」

島崎 恒夫

信州上田の市街地を見下ろせる丘陵地帯の一角に「館」があった。コンクリートに何の加工もない素朴な灰色の壁に囲まれた「館」が林の中にあった。正面には彫り文字で「無言館」、その上に「戦没画学生慰霊美術館」とある。

入口に受付がない。「入館料は出口で。随意に(五百円〜千円)」と書かれた表示板があるだけ。入館するとすぐに美学生生の描いた作品が両壁面に飾られてあった。平和であつたなら名を残す画家になつていたのであろう優れた作品もある。中央にはショーケースが置かれ学生が親、兄弟、親友に出した書簡やスケッチブックが収まっている。志半ばで、片道



無言館での筆者

切符の特攻機に乗り沖繩の空で生涯を閉じた美学生たち。南方基地に配属され椰子の葉の家のスケッチを残して消息を絶つた若き画家たちの遺品の数々である。お父様、お母様とある書簡には「衣類を送ってくれてありがとう、お体をお大切に」との墨跡が。明日には戦場に立つ若者が両親や兄弟の健康を気づかっている。その心情が胸を打つ。見学者は折り目のついた写真の中の笑顔に目頭を押さえた。

しんと静まり返った館内に人の気配はあつても話し声はない。普通の美術館にはない異様な静けさである。館内をぐるっと見渡して気づいた。館は東西南北に長く、それは恰も十字架を思わせる設計になっている。戦死した画学生の作品と遺品七百余点への鎮魂を込めた造りなのだ。「静かに、静かに確かめて下さい。彼らの生きた証を」と記した案内に館主の心根をみる。「折り」を捧げる美術館。いや、戦後六十年、我々が生きながらえて来たことへの感謝を捧げる美術館なのかも知れない。

館主は窪島誠一郎氏。作家水上勉氏の「子息である。(入学生務部・広報室長)」

生活福祉実習で感じたこと

金内 智美

私は、夏休みに音楽療法士の資格をとるための実習として、郡山市内の寿泉堂香久山病院に二週間行ってきました。その病院は音楽療法にとっても意欲的で、各フロアにピアノ

が置かれ、私が見たこともない楽器もあつてとても驚きました。

この病院には認知症などのお年寄りの方がたくさん入院されており、私はそういう方と接するのは初めてで、どう接したらいいのかわからず、とても緊張し戸惑いました。けれども、リハビリのためのデイケアでは昔流行った歌や童謡を歌うと、覚えていられる方が一緒に歌ってくれたり、涙を流して聴いてくれたり、とても嬉しくて私のほうが感動してしまいました。リクエストされた歌を歌うと、本当に目を輝かせて喜んでくださり、やり甲斐を感じました。

会話をすることができなくても、音楽を通してコミュニケーションをとることはいくらでもできるし、そうすることでお互いに楽しくなれます。この実習を通して音楽の素晴らしさを改めて感じる事ができました。

(短期大学部音楽科二年)



デイケア実習風景

一万人のチームメート

鈴木 まみ

今年に入り、地球温暖化防止の対策として温室効果ガスの排出量削減への努力が活発化しています。その一つとして挙げられるのが環境省が呼びかけている「チームマイナス六パーセント」と言う温暖化防止国民運動です。

二、三年前から温暖化による異常気象など私達の目に見える形で様々な影響が出始めています。このまま地球の温度が上昇し続けると、沖縄は熱帯気候となり、また関東地方では南国の果実が栽培できるほどの気候に変化してしまいうそうです。

そうならないために環境省はリサイクルや節水、クールビズなどの身近でできる対策を呼びかけています。県内でもいち早く郡山市といわき市が市民に呼びかけをするなどの対策をとっています。

温暖化防止対策をすることにより、今以上環境の悪化を防ぎ、また継続をしていくことで徐々に改善をしてゆけると思っています。これらの対策を通して私達は地球や環境に対して目を向け、互いに傷つけ合わずに共存ができる方法を見つけ出すことが温暖化対策をしていく上での主軸となると思います。

(高校普通科自然科学コース三年)



筆者

私の本棚

司馬遼太郎著

『坂の上の雲』

文春文庫 全八巻

郡山女子大学 講師
石田 智宏

日露戦争後の明治日本を舞台にした長編歴史小説。海軍参謀秋山真之と俳人正岡子規の少年時代から日本海海戦までの時代を描いた司馬遼太郎の代表作である。大学生時代に読了した本書であるが、

人間は誰しもが健康で長生きしたいという願望を持っています。健康とは、身体的な能力が最大限に発揮され、精神的にも健全で個人の活動が社会に調和し、心身ともにバランスの良くとした状態であると言えます。

食生活は体の健康だけでなく、心の健康にも大きく影響します。最近ではダイエットで肉などを食べない人に「精神的(うつ)になりやすい」と注目を浴びており、多くの研究から脳内のセロトニンを増やすとされる薬がうつ病の特効薬になっている。セロトニンはトリプトファンという必須アミノ酸から作られ、トリプトファンは食肉、赤身の魚肉、牛乳などに多く含まれており、実際、肉摂取を制限し、トリプトファンの摂取を減らすと脳内のセロトニンが減ってうつ状態になるとの報告があります。また、子供を対象とした調査では「ライラする」者は朝食の毎日摂取頻度の低いこと、「考えがまとまらない」者は夜食の毎日摂取頻度が高いこと、これらの不定愁訴の出現は朝食の肉・魚・卵・朝夕食の野菜摂取に関する

生活診断室
シリーズ 38

心の健康と栄養バランス

郡山女子大学短期大学部 講師
水野 時子

係していることを示唆する報告があります。めまぐるしく変容する現代社会は、ストレス(外部からの有害作用因子)の多い時代です。ストレスに対する生体の抵抗力を高めるためには、栄養のバランスの取れた食事を摂ることです。栄養のバランスのよい食事は量と質と食方で決まります。献立作成においては特定の食品摂取に偏ることなく多様な食品を組み合わせた料理においては主食と主菜それに副菜をそろえることにより多様な食品で、自然に必要な栄養素をバランスよく摂ることが出来ます。食

べ方においては摂取のタイミングを考え、欠食、夜食、早食いなどの不適切な食べ方を避けるなど一日三回、規則正しい食事を心掛ける必要があります。

身近にある「食」が体の健康だけでなく心の健康を左右する重要なものであることを再確認し、バランスのよい食生活で心身ともに健康な毎日を通していきましょう。

いまでも袍につめて旅先で読み返すことしばしばである。

思えば社会や歴史はすべて必然の上に成り立っているのかもしれない。日本の近代史を学ぶ機会をほとんどもたなかった私にとって、本書は近代という時代とその中で近代日本の成立に関心をもちつづきのきっかけとなった。

全巻のおよそ四分の三は日露戦争の推移に関する記述であるが、それ以外にも、当時の日本を囲む国際情勢の描写や、多くの将官たちのエピソード、子規に関する文学論にいたるまでの事項が作者の

筆力によって巧みに織り交ぜられ、読者の興味を最後まで損じることのない優れた小説であると感ずる。

明治の日本を考へることが本書の大きなテーマであるが、明治を考へることが昭和の理解へとつながり、さらにそれが日本の現状を認識するための知見と示唆に富むものであることがわかる。日本人の歴史認識が世界から問われる今日、日本と世界をあらためて考え、百年前の若い日本に生き、坂の上に見る雲をめざして歩んだ人々の道程を確かめるの一冊にあらためて目を通してみたい。

就職活動に備える

大学・短大 就職部



ガイダンスで体験談を通してエールを送る先輩社会人

ホームページの利用方法を指導した。また、大学三年生は実社会で活躍している卒業生から現況を聞いた。ケアマネジャーや栄養教諭になるための現状、総合病院での管理栄養士の業務など体験を通しての貴重な話であった。学生は質問をしながら、より確かなものをつかもうと模索を始めた。就職活動の一步を踏み出した。

公務員試験対策特別講座

九月以降に実施される公務員試験の対策として、八月には特別講座を開講した。この講座は国家Ⅲ種、地方中級、初級、資格免許職、市町村職員等を受験する学生を対象に、教養試験の得点アップを図るためのものである。

受講者は、「数的処理」「文章処理」「社会科学」等の問題に真剣に取り組んでいた。

夏季実技体験講習会

短大・生活芸術科

生活芸術科の夏季実技体験講習会は七月二十七日から二十九日まで開かれた。県内外から二十名が参加した。

デザインコースの受講生は、布や骨などの静物モチーフを真剣な眼差しでみつめ、黙々と鉛筆を走らせていた。CGコースではソフトウェアの基本操作を学びポストカードを制作したが、みんな興味を持ってコンピュータに向かっていた。また、彫刻・陶芸コースでは粘土でシーサーを楽しく制作するなど、受講生にとって充実した体験講習であった。

手先を器用に使って

であった。

認定テストに取り組み

短大・音楽科

本短大音楽科への入学を希望する高校生を対象にした夏期講習会が八月八日から三日間開催された。受講生は三十名。県内はもとより秋田、山形、栃木の遠方からも参加した。ピアノ、声楽、ヴァイオリン、クラリネットの各専攻に分かれ個人レッスンのほか、ソルフージュ、楽典の講習も受けた。

酷暑の中で時間外に追加レッスンを希望する生徒もおり、充実した三日間を過ごした。最終日には楽典聴音、新曲視唱の認定テストが行われた。これに合格すると入学選抜時にこの種目が免除されるため真剣に取り組んでいた。

熱戦。校長杯争奪校内球技大会

附属高校

校長杯を賭けた校内球技大会は七月十九日、二十日の二日間繰り広げられた。バレーボール、バスケットボール、ソフトテニス、キックベースボールの四種目に各クラス代表チームが技を競った。一喜一憂、クラスメイトへの応援にも熱が入る。一つの目標に向かつて教師と級友の融和と団結を図ったことは今後の学校生活にも大いに活かされていくものと思われる。



夏恒例の球技大会 監督にめげず技を競い合う

結を図ったことは今後の学校生活にも大いに活かされていくものと思われる。

クラスの和がハーモニ

附属高校

心をひとつにしてクラスの和を図り、学年間の交流を進める校内合唱コンクールが今年も盛大に開かれた。全三十クラスが練習を重ねた選定曲を次々に披露、一つの曲へ心を集中し歌い上げた瞬間が感動を呼んだ。審査の結果、三年生のエルギーが結集され、学校長賞に三年六組「落葉松」が賞に三年三組と三年八組が輝いた。



音楽科・合唱部全員による大会合唱で幕が開く

後にその学習の成果が披露された。演奏曲はベートーヴェンの交響曲第五番「運命」の終楽章である。短大生と高校生が一つになつて集中したハーモニーを奏でた。

定期演奏会で成果を披露

高校 音楽科・音楽部

音楽科・音楽部による定期演奏会は本年度も七月二十三日、建学記念講堂大ホールで開催された。オーディションで選ばれた演奏者は独唱やピアノ独奏などで美しい音色をホール一杯に響かせていた。

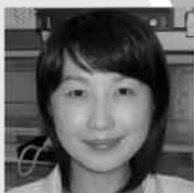
本学園の教育方針として高大連けい五ヶ年教育があるが、その一つに郡山開成学園オーケストラがある。短大と高校の音楽科が合同で授業を行っている。この日のプログラムの最後

項非さん 全国二位

日本学生水泳競技大会

大阪で開催された水泳の第八十一回日本学生選手権大会の女子高飛び込みで本学・人間生活学科三年の項非さんが見事二位入賞を果たした。昨柳まいさん(同三年)は十一位。団体では四位となった。

先輩を訪ねて



大槻 有希さん

●平成10年度家政学部栄養学科卒業
●寿泉堂総合病院栄養管理科

管理栄養士として寿泉堂総合病院に勤務されている大槻さん。病院栄養士をめざしたのは、人のために働く仕事、人に喜んでもらえる仕事をしたかと思ひながら、自分ができるかを考え悩んでいたとき、

同窓会で思い出語り合

附属幼稚園

ちと過ごすことの喜び、期待で子どもたちの表情は輝いていた。先生方が心をこめて作った夕食のカレーをお腹いっぱい食べ、隣接する家庭寮の大きなお風呂で入浴し、夜九時の消灯時間を迎えた。翌日は宝探しゲームやスイカ割りなどで楽しんだ子どもたちは満足した表情で迎えの家族と共に帰路についた。

食品の機能性を学ぶ

附属幼稚園父母の講座

附属幼稚園では七月十一日、本年度第三回の父母の講座を開いた。講師は本学教授の広井勝先生。テーマは「食品の機能性について」。食品は従来から知られている栄養的機能(一次機能)嗜好的機能(二次機能)の他に生体調節機能(三次機能)を有することが明らかになってきており、この三次機能を有効に利用することが健康につながることを説明した。また、三次機能成分を有効に利用する食品として開発され、市販されている特定保健用食品についても話された。保護者にとっても関心の高い健康対策とあつて熱心に聴講された。

プール終い どじょうつかみ

附属幼稚園

好天に恵まれた八月三十日、附属幼稚園恒例の「どじょうつかみ」が行われた。プール終いを兼ねての行事で、年少、年中、年長組の順でプールに入り、放たれたどじょうを追った。用意されたどじょうは八ヶ、約二千尾。歓声を上げながら往く夏を惜しんだ。



水の感触も楽しんだ園児たちのだじょうつかみ

恩師から病院栄養士の仕事について聞いたのがきっかけでした。「最初のころは、食事指導をするさい、患者さんそれぞれの年齢や理解力に合わせてわかりやすく説明するのに苦労したこともありました。が、食事療法により病状がよくなった方、食事摂取量が少なくなつた方が食べられるようになったりして、患者さんの笑顔を見ることができるとはとても嬉しいですね。」

友人たちとの出会いや、卒論に真剣に取り組んで発表したことなど、懐かしそうに語る大槻さん。なか

でも、大学の海外研修で台湾の歴史や文化に触れ、輔仁大学の学生と交流できたことは忘れられない思い出だそうです。

「食に携わるものとして、病気の予防のため、また病気になるのを防いだときに、共に考えながらサポートできる栄養士でありたい。そのためにも、学ばざるをえない」と思い、スキルアップしていきたいと思ひます。在学生の皆さんも、今を大切に、興味あることを深く追求し学び、いろいろなことにチャレンジしていつかだささい。」とアドバイスをいただきました。

第百四十八回芸術鑑賞講座「感性の庭に知の花はさく」

それぞれの美への憧れ 女流画家五人展

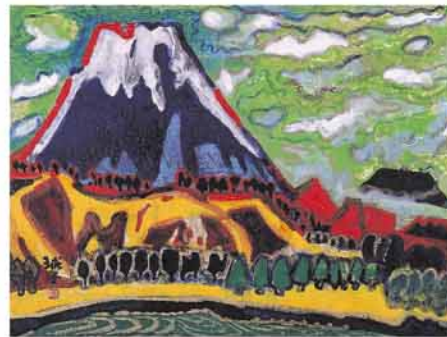
小倉遊亀、片岡球子、三岸節子、秋野不矩、莊司福 十月十七日より開催

本学園の芸術文化教育として創立以来続けている芸術鑑賞講座では、平成十一年から日本の女流画家展をシリーズで開催してきた。

莊司福、三岸節子、秋野不矩、小倉遊亀を紹介、本学園ならではの企画展と高く評価された。

さて、来年は本学園創立六十周年を迎える。その記念年の前奏として前記画家に片岡球子を加えた「それぞれの美への憧れ 女流画家五人展」を企画、関係者に打診した結果、快く作品の提供を承諾され開催が実現した。

開催期間は十月十七日から十一月二日までの十八日間。会場は本学記念講堂内ギャラリー。展示作品は三十点。入場無料。



初めて一般公開される片岡球子の「富士」

宮澤賢治の世界へようこそ ミュージカル銀河鉄道の夜

第百四十六回
芸術鑑賞講座

第百四十六回芸術鑑賞講座は六月二十一日宮澤賢治没後七十周年記念のわらび座公演「ミュージカル 銀河鉄道の夜」を建学記念講堂大ホールで上演した。

ジョバンニ(窪寺杏)とカンパネラ(碓井涼子)の親友同士が銀河鉄道に乗り合わせ「本当の幸せ」を探るといふ夢と現実の狭間をミュージカルで綴る感動と感動の舞台。学生、生徒、千六百名が鑑賞した。

銀河鉄道の廻る、廻るセトは狭い空間を大きく見せた秀作で、劇の盛り上がりを支えた。また、劇の前後で繰り広げられたケンタウルス祭の群



宇宙の果てをめざすジョバンニとカンパネラ

舞は、わらび座のお家芸、若い力の結集が舞台を飾った。

学生、生徒、児童を災害から守る 耐震補強工事 この夏 本館 高校西棟 幼稚園を完了

平成十五年度から実施している学園の施設耐震補修工事は、附属高校東棟、大学家政学館、62年館に続いてこの夏、本館、高校西棟、幼稚園を完了した。



新装なった本館(事務棟)

この工事は学生、生徒、児童が一日の大半を過ごす学習、生活の場である施設の安全性を確保するためのものである。最新技術による工法で窓枠に大きな支柱が組み入れられ上階の倒壊、崩落に備えたほか、一部建材の交換等により一層の安全が図られた。来年の春休みに芸術館、図書館、高校特別西棟を予定している。



園児も安心(幼稚園園舎)

学外実習で介護補助体験

短大音楽科
音楽療法士コース

音楽科での音楽療法士資格取得には、社会福祉施設や病院等での「生活福祉実習」が必須。

今年度は音楽療法士コースで学ぶ二十名全員が郡山市の寿泉堂香久山病院の全面的な協力を得て、夏休み期間中に介護補助実習を行った。病院側の実施プランに沿っての実習で、始めの三日間は集中講義、講師として春山和見院長、湯浅和憲事務局長、芳賀定子総看護科長、田中幸子看護科長、山崎勝則技師長、味川春子講師、矢部まゆみ講師ら幹部が務め「認知症および終末期医療概論」「介護保険制度概論」「日常生活支援」等々を講義した。二週目と三週



歌唱指導で患者さんとの交流を図る学生



親身になってお話を聞く介護補助実習の学生

木もれ陽

暑い夏であつた。気象庁によると、この夏(六・八)月、東京、名古屋、大阪、福岡の四都市で、最高気温が三〇度以上の真夏日が大阪の六十七日を最多に、いずれも半年を上回ったという。

時は過ぎ、空気がさわやかに感じられる昨今である。

九月十九日、今年も敬老の日を迎えたが、中高年男性にとって一つの朗報が八月三日のある新聞で報じられたことを紹介したい。それは、料理を行うと、思考や感情をコントロールしたり情報を選択したりする脳機能が向上すること、中高年男性(五十九・八十一歳の男性二十一人)を対象とした研究で、東北大学の川島隆大教授と大阪ガスの共同研

本学所蔵 紙上美術展 48

「アカイヤネノキモチ#2」

齋正機



2001 顔料 147.0cm×194.0cm

齋正機氏は福島市出身で現在、名古屋市中で創作活動を行っています。齋氏は洋画、日本画の垣根を取り払い、豊かな表現で「キモチシリーズ」を発表し、注目されました。そのキモチシリーズ「ドコカノ風景」は昨年の十二月一

日から五日間、本学園の第百四十四回芸術鑑賞講座で紹介しました。その中でひとときわ引き立つたのが「アカイヤネノキモチ#2」でした。創学館ネーチャードーム・回廊美術館に常設されてあります。

究チームが実証したということである。この判断力などの脳機能は、人間の知的活動の中枢をつかさどる。おでこのすぐ内側にある前頭前野の機能といわれる。そしてこの機能を保持することが認知症、痴呆症の予防に重要であるとされる。従って、今回の研究は、料理をする、認知症を予防する可能性があることを示唆するものといえる。

現在、認知症の高齢者は一七〇万人、十年後二五〇万人、二十年后には三三〇万人に増えると推計されている。こうした動向の中で、予防は喫緊の国民的課題である。本学の特色の一つである食物栄養学科専攻の役割が今後ますます大きくなっていくことがわかるのである。その一つとして、高齢者の健康と脳のために、調理講習会を開催することは一考に値するのではないかと考えるのである。(彌)